

学びの風便り

リーディングスクール通信 18 R6.3.29

発行：松本市教育委員会 教育研修センター

特集 学びの改革のあゆみ 中山小学校

子どもの興味関心に乗っかるか、教師主導で始めるか



4月当初、リーディングスクールとして動き出した先生方の間では、生活科、総合的な学習の時間をどのように立ち上げていったらよいか問題になりました。「私としては●●をしたいけれど、子どもが乗ってこなかったらどうしよう」、「子どもからやりたいことがでてこなかったらどうしよう」、「やりたいことがいくつも出てきて、1つに決まらなかったらどうしよう」など、様々な不安が動き出しを躊躇させます。しかし、中山小学校の先生方は対話を重ねる中で、「いずれのスタートであっても、体験を通して子どもたちの中に問

いが生まれているかが大切ではないか」という結論を導き出しました。この1年間を振り返ってみると、中山小学校の先生方は、「同僚との対話」によって、様々な困難を乗り越えてきたように思います。

子どもたちから生まれる「問い」や「願い」をまっちゃうける

先生方は、子どもたちを様々な場所へ連れて行ったり、ある子どもが何か関心をもつと、それをみんなで味わってみる場を設けたりするなど、「出会う」機会をもつようになりました。田んぼの跡地で遊んだり、生き物とかかわったりする中で、子どもたちからは、「米を作ってみたい」「池を作ってみたい」などの願いが寄せられるようになりました。先生方はこの声に耳を傾けながら、「子どもたちの願いを実現させるために、自分にできることは何か」「願いを実現していく中で、子どもたちに育つものは何か」と、常に問い続けていきました。



先生方はこの声に耳を傾けながら、「子どもたちの願いを実現させるために、自分にできることは何か」「願いを実現していく中で、子どもたちに育つものは何か」と、常に問い続けていきました。

次から次へと生まれる課題を乗り越える



田んぼを開拓し、米作りを始めようとした子どもたちは、もちろん田んぼの耕し方も知りません。苗はどこから入手するのか、どうやって植えるかなど、わからないことがいっぱいです。自分たちで調べていきます。その中で、地域で米を作ることを生業とする人と出会い、本に載っていない本当のことを知ることもありました。本に載っていたことの意味を知ることもありました。手作業で行うと大変なことも、昔の人は知恵を絞って機械を作り、効率的に作業が進められるようになったことも実感として経験しました。わからないことは自分たちで

調べ、試し、それでもわからなければ人に聞き、子どもたちは生まれた課題を自分の力で乗り越えていきます。そんな子どもたちと共にいる先生も、子どもたちの「試行錯誤して問題を少しずつ解決していく力」、「他者と関わる力」が伸びてきていることを感じていきました。

子どもたちに育まれたものは、「生き方」だった

こうして、中山小学校は自分の願いを実現させた充実感を味わいながら成長していきました。「子どもの何がどう変わったか」と、とある先生に尋ねたところ、「生き方です。困難に出会ったときにも、『大丈夫』、『試してみよう』と言う子が本当に増えた。予測困難な時代を生き抜く力だと思います。」とおっしゃっていました。中山小学校のシンカは、この先も止まりません。



リーディングスクール事業 1年間を振り返って

『子どもが主人公』の学校づくり・授業づくり」に挑戦してきたリーディングスクール実践校。昨年3月23日の「キックオフ・ミーティング」をスタートとして、その歩みは1年が過ぎようとしています。

すでに本通信やWebページでご紹介し、また、1月に行われた「リーディングスクール・フェス」でご発表いただいた通り、この間、各学校では「子ども主体の学び」をめざして、それぞれの実践に挑戦いただきました。

この3月、各校から実績報告をご提出いただきましたが、その中に、各校の先生方が「こんなところに取り組みの成果を感じた」という実感をたくさん寄せていただきました。小さな「ひと言」や「一瞬の姿」かもしれないけれど、確かな学校のあゆみの中で育まれた実感。これこそが、かけがえのない価値ある事実であり、成果の具体であると感じています。そんな一部を紹介させていただきます。

前を向いて黒板を写している学習やプリントで穴埋めをするような授業形態から、**生徒同士が課題について意見交換をしたり、自由に動きながら課題を解いていこうとする様子が増えてきました**。社会の新規採用の先生が「生徒同士が意見交換する授業を実施して、**生徒が主体的に活動してとても面白かった**。別の単元でもやってみたい」と話してくれました。(中学校)

先生たちが「生徒一人一人は自律した学習者」という意識で「教えない（教え込まない）授業」を進めてきたことで、**生徒の意識や姿も、「協働追究型」のスタイルがスタンダードになりつつあります**。生徒からも「いつも友達と話す時間をとってくれて、思いつかなかった考え方などを知れて考えを広めることができました。」といった声が聞かれるようになりました。(中学校)

子どもたちは、単元内自由進度学習を振り返って、「**大変だったけれど、自分で進める力がつきました**。またやりたいです」「分かるところを、みんなに合わせてゆっくりやらなくていいし、自分が分からないところはゆっくり考えられました」と、自分のペースで学ぶことの良さを感じ、学び方に自信をもつことができました。他の一斉授業においても、**指示待ちの姿勢が少なくなり**、自ら探究の方法を見つけて、課題解決に取り組む姿が多くなってきています。(小学校)

【3年生の生活記録から】今日は数学で円周角の定理をやりました。**数学の授業では、話し合うことが多いです**。4人班の机で授業をするようになり、「この問題ってこうやって解く？」などの会話がしやすくなりました。数学は、けっこう問題の答えが本当に合っているのか不安になりますが、目の前や横に**クラスメイトがいることで確認がし合えるので自信がついたな**と思っています。

【先生の振り返りから】4人グループに生徒が慣れてきて、スムーズに授業に入っていきます。人間関係が柔らかく滑らかになってきていると感じます。**話す言葉の調子が変わってきて、おだやかになっています**。**小鳥のさえずりのように聴いていて心地いいです**。安心して話している様子が伝わってきます。(中学校)

「中山っ子の時間」を楽しみにしている子が増えました。「次の中山っ子の時間はいつ？」「次はこれをしたいい！」など自分たちがやりたいことを試せる時間と考えられるようになってきたようです。ある先生は「**ルールを敷きたくなる自分でしたが、子どもに委ねるとい実践にチャレンジできた1年でした**」と振り返り時に語っていました。教師自身も探究者として意識が変わってきたのを感じます。(小学校)

目指す子どもの姿、授業像をみんなで共有し、学校がひとつになって、そのテーマに向かって歩みを進める時、先生たち、子どもたち、そして地域・保護者の皆さんをも巻き込んだ大きな「うねり」が生まれることを、リーディング（パイオニア）スクール実践校の皆さんには示していただきました。そして今、その「うねり」は、松本市の小・中学校全体に広がりつつあることを様々な機会に実感しています。

次年度、あらたに実践に踏み出したい！と手を挙げていただいた6校、合わせて19校のそれぞれのチャレンジに学びながら、「子どもが主人公」の松本の学校づくりのいっそう大きなうねりを、私たちみんなで創っていきましょう！